

令和5年度大島賞・CSA選考結果報告

褒賞選考部会
委員長 横尾 隆

大島賞は、若手研究者を対象に、将来、本邦の腎臓学研究のリーダーたりうる人材を顕彰することを目的に設けられている。第30回 令和5年度の大島賞選考委員会は令和4年10月2日に行われた。今年度も複数名の候補者の推薦があった。褒賞選考部会では、候補者の研究業績の質と広がり、および将来性などについて多岐にわたる熟議が行われ、以下の2名を大島賞に値するものとして理事会に推薦し、令和4年11月27日承認された。

大島賞

田中真司氏 東京大学

研究主題「炎症を標的とした腎臓病新規治療戦略の開発」

田中氏は東京大学大学院時代から一貫して炎症を主なテーマとして研究を行ってきた。急性腎障害における腎機能悪化にpericyteでのvascular adhesion protein-1が重要な役割を話していること、SGLT-2阻害の腎保護作用のメカニズムやHIF-PH阻害の腎障害軽減のメカニズムの解明など、実臨床での疑問となる問題を基礎的立場から解明した功績は大きい。留学先でも迷走神経刺激による急性腎障害に対する保護効果に関わる神経免疫関連のメカニズムの解明などを行っている。帰国後は慢性腎臓病まで対象を広げ、炎症に関する研究を継続し、留学先との共同研究において腎臓perivascular cellにおけるスフィンゴシン1-リン酸シグナリングが炎症および線維化を推進することを見出している。

このように田中氏は炎症に伴う腎障害のメカニズムの解明を通して実臨床での疑問に答える形で一貫して研究を進めてきた。その功績は国際的にも高く評価されており、今後も腎臓病学の牽引に大きく貢献することが期待され、大島賞に値すると評価された。

三島英換氏 東北大学

研究主題「フェロトーシスと腸内細菌叢を標的とした腎臓病の治療法開発」

三島氏は現在では広く普及している「腸腎連関」という概念にいち早く着目し、腎臓病における腸内細菌叢と尿毒素の関わりを解明し報告している。また現在のトピックスの一つであるフェ

ロトーシスがまだ注目される以前から研究を開始し、既存の臨床承認薬のスクリーニングからフェロトーシス抑制作用を有し急性腎障害を軽減させる化合物の同定を行なっている。留学後もフェロトーシス研究を継続し、日本で見出した知見をもとに研究を発展させビタミンKサイクルがフェロトーシスの抑制因子であることを発見しNature誌に報告している。このように三島氏はトピックスになる前の重要な研究課題を見出し、いち早く着手する嗅覚とそれを展開する技能の両者を兼ね揃えている。今後も腎臓病学の牽引に大きく貢献することが期待され、大島賞に値すると評価された。

CSA

CSA(Clinical Science Award)は、本邦の腎臓学におけるヒトを対象とした臨床研究のリーダーたりうる中堅研究者を顕彰することを目的に新たに設けられた。第7回 令和5年度のCSA選考委員会は令和4年10月2日に行われた。今年度も複数名の候補者の推薦があった。褒章選考部会では、臨床研究について、手法の如何を問わず、結果として疾病、病態の診断、予後、治療等に直接的に結びつく研究と定義した上で、この定義に沿った研究成果とその継続性に着目して多岐にわたる熟議を行い、以下の1名をCSAに値するものとして理事会に推薦し、令和4年11月27日承認された。

福田 顕弘 氏 大分大学

研究主題 「慢性腎臓病の重症化予防を目指した尿中ポドサイトマーカの臨床応用」

福田氏は、留学中にpodocyte脱落が糸球体疾患を進行させるというpodocyte depletion仮説を遺伝子改変ラットを用いて証明し、帰国後も研究を継続し別のモデル動物を用いて同仮説の補強を行なっている。この事象を基盤とし尿沈渣中のpodocyte由来mRNAが疾患活動性や治療反応性を示すバイオマーカーとして有用であるという仮説のもと、IgA腎症、抗GBM抗体型腎炎、ANCA関連糸球体腎炎の臨床症例で検証し報告している。さらに尿沈渣中podocyte mRNAはpodocyte脱落を示唆する管外増殖性病変で、尿上清中podocyte蛋白量は、微絨毛様構造物の排出が多い疾患(膜性腎症)で高値を示し、尿沈渣と尿上清で異なる情報を得る

ことができることを報告しており、現在大規模臨床研究に着手している。このように福田氏は基礎研究で得られた現象を臨床で証明していく流れを実践しており、基礎と臨床でバランス良く研究を進める才覚を有し、今後もさらなる貢献が期待されCSAに値するものと評価された。